防)、

あるいは治療の過程で行う

保健指導やリハビリテー

-ションな



介護職員が、毎日の介護業務の一科衛生士からアドバイスを受けた

つとして入所者に口腔ケアを行う

すなわ



医療と福祉の連携のために ムレスな多職種連携 '推進を目指し'

望に立てば、国民医療費の適正化

門職との連携が不十分になったり、 務の忙しさから介護職員と歯科専

にも繋がると考えられます。

命の延伸〟をもたらし、

長期的展

医学として大切なことです。

それ 予防

ることが可能となります。

しかし現実には、

日々の介護業

た対策(三次予防)もまた、

る

「食事」を高いレベルで維持す

てこそ入所者の一番の楽しみであ ちシームレスな口腔ケアが行わ といった、継ぎ目のない、

ど再発防止や社会復帰を目標とし

ゆえ、予防医学の実践は〝健康寿

や高齢期に起こる摂食嚥下障害に

ションなどは、

は、

介護職員の離職率の高さな

ようです。こうした状況の背景に りがちになってしまうことがある 入所者への口腔ケアが後回しにな

どマンパワ

不足もその原因の

歯科においても、学童期の食育

大学院医歯薬学研究部口腔保健支援学分野 教授(写真中央)

尾崎 和美(おざきかずみ) 同地域医療福祉学分野 教授(写真左) 白山 靖彦(しらやまやすひこ) 同口腔保健福祉学分野 講師(写真右)

柳沢 志津子(やなぎさわしずと)

単に口だけ

つですが、介護業務の多さに加え、

´」もまた誤嚥性肺

あげられます。

交代制をとる介護

にする責任が強いられる点などが 介護記録により業務の根拠を明確

介護保険制度

介護記録に記した情報を共有しま 業務では担当者同士の申し送りで

口腔ケアという観点から

の

しかし ら ーつ 疾 食 そ ており、 携が深まりつつあります。例えば、 野と「歯科・口腔保健」 高齢者福祉施設において歯科衛生 も口腔ケアの重要性を認識し始め つあります。 護高齢者への口腔ケアが普及しつ 科専門職(歯科衛生士)による要介 の導入を経て、 における「口腔機能向上サービス」 とが研究で示され、 炎や認知症の予防に有効であるこ の問題ではなく全身の健康に大き 肺炎の予防に貢献し、 生活習慣病や誤嚥性(ごえんせい) 対するリハビリテ く寄与する対策と考えられていま 「口腔ケア いわば「介護・福祉」

介護者あるいは歯

療従事者と情報を共有するため 詳細な申し送り、ましてや歯科医

0)

ールは、現在のところほとんど

よって重症化を防ぐ対策(二次予病の早期発見・早期治療などに 早急に解決すべき課題を生み、 ながら、国民医療費の増せの一つと言えるでしょう。 (一次予防) として重要ですが、 善することで生活習慣病を予防す 重要性』が見直されています。 うした背景により、 るといったことも予防医学の 生活をはじめとする生活習慣を改 国民医療費の増大と ″予防医学の 士が専門的な口腔ケアを行い、

えています。高齢化は、

す なわ

ち

″平均寿命の延伸』であり、こ

れは医療の進歩がもたらした成果

の分野でも介護記録のICT

化

ようなシステムを導入し、それ れまでの運用をなるべく変えな はありません。特に日本は世界で

なってきていると言っても過言で

高齢化対策は、

人類的課題に

施設で働く介護職員

見当りません。

さて、

近年の目覚まし

V

分野の連

分

報通信技術 (Information and

Communication Technology .

CT)の進歩によって医療に限

歯

らずあらゆる業界で

もトップクラスの超高齢社会を迎

口腔ケア推進事業

高齢者福祉施設における

CTシステムを活用

した

ん。現場の声とそ大切です。」良を加えていかなければなりませ ることが求められますから、 の嗜好や家族の要望などにも応え きない様々なこと、 なります。しかし現場では予測で 状況の変化も見落とさないように 職と歯科衛生士の意思疎通がス ICTや運用双方のシステムに改 ムーズになると、入所者の些細な 「ICTシステムを通して介護 さらに利用者 常に

終わりなき挑戦

背景に着目

I C T

を駆使し

尾崎先生たちは、

このような

と考えています。

たな利活用方法を目指していきた

てだけではなく、

疫学研究など新

で、単に業務効率化のツールとし ビッグデータとして蓄積すること くは施設ごとのデー

タをまとめて

ことを期待していますし、ゆくゆ の口腔ケア連携が推進されていく システムの普及によって、施設で に慣れてもらうことが大切です。

ー ワ

ードは「情報共有」

携も一層進展すると考えられます。 口腔ケアが一層定着し、多職種連 管理できれば、介護業務としての アに関する情報を ICT 技術で 科衛生士や介護担当者間で口腔ケ す。口腔ケアという観点からも歯 がようやく普及し始めたところで

ト」の中で、高齢者福祉施設への んできました。 先生方は、 CT システムの導入という 口で口腔ケア推進事業に取り 組んだ「I 车 から5カ年計画で取 徳島大学歯学部 C Tプロ ジェ 組 切 ク

鋭意行っています。 の構築とその普及に向けた活動を るような包括的 ICT システ に限らず食事など栄養管理もでき 現在先生方を中心に、 口腔ケア

式は少しずつ異なります。

施設間

共有

し、協働して管理することで

システムを用いて個々のデータを

せることが大事なので、

各施設で

りました。

したがって、

このシス

、ムはデ

ータの共有だけでなく、

が統計学的にも増えることが分か 例えば介護職と歯科衛生士の会話

が、今はICTシステムを普及さ で統一されている部分もあります 施設によって運用や介護記録の様

「口腔ケア業務も介護業務も、

先生が担当しました。

すが、

実際にこのシステムを導入

した場合、

結果は逆でした。この

高齢者福祉施設に導入

しました。

システムの開発は尾崎

シ

ョン量が減るようなイメージで

福祉現場でのコミュニケー

システム(口腔保健業務支援システ 健業務を含む歯科的支援のための た『介護・福祉の現場への口腔保

生の役割です。

り多くの高齢者施設などに導入を

一般化していくのが白山先

構築したICT システムをよ

″ACSSOC*)を開発し、

「一般的にコンピ

ユ

タ化が進

現在開発中で、将来的にはこのシ 判別のためのアプリケ ステムに組み込む予定です。 の利用を想定した認知症の重症度 「医療機関や高齢者福祉施設で 今後の目標について白山先生は 施設で積極的に行われ ションを

設では、こういったシステムに最 初から拒否反応を示すこともあり

設の運用それぞれのシステムに

ィードバックするのは柳沢先生

CT化が全くなされていない施

ます。そのような施設には、

の役目です。

カスタマイズしています。業務の 式にある程度沿うようシステムを 運用している業務や介護記録の様

で必ず役立つものと思います。 職種間の意思疎通を円滑に図る上

肝心な現場の声をI

Ċ T

や施

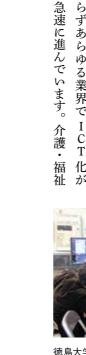
テムへと進化させていきたいと考 的に蓄積・管理できるようなシス グを組み、必要な情報をより包括 さらに様々な分野の専門家とタッ W 組みをサポ えています。」と展望しています。 に実現したいと思います。 のアルゴリズム)も近い将来のうち ある経口維持・経口移行への取り 現在、 e b システム(食形態選択のため するための新規 今後は、

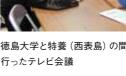
つつ、 援システムを新たな施設に導入し などでよりき した施設に対しては、 一方でシステムを既に導入 開発した口腔保健業務支 め細やかな歯科 テレビ会議

は続きます。

飽くなきチャ

の向上を ポ でなく在宅の要介護高齢者へのサ 今後も口腔保健支援のためのシ な体制を整備していく予定です。 勿論のこと、高齢者福祉施設だけ 口腔ケアの思想普及や啓発活動は 多くの高齢者福祉施設への導入を 援を行っています。 いう両面からサポ の「食」の QOL 今後もシステムの更なる拡充と も視野に入れながら、 介護・福祉分野における ICT あるいは運用と (Quality of Life) トできるよう 人々









ACSSOC介護職版の導入説明





7 8